

簿記に関する文献のテキストマイニングによる 分析

和光大学現代人間学部 金井りほ

学籍番号：09P029

【キーワード】 簿記、複式簿記、テキストマイニング

1 問題

現代に置いて共通に使われているものがある。それは、お金である。価値の交換として数字がついた通貨があれば、その数字に見合ったサービスを受けることが可能になり、その数字の価値がある商品を手に入れることも可能になる。学校に行って専門的な分野を学ぶにしろお金は必要で、モノが増えるだけの効果ではなく個人の知識財産が蓄えられる権利を得る一つの道具とも捉えられる。では、そもそものお金自体はどこから得られるのか？アルバイトでも正社員でも企業といった組織に属し、働くことである。働かざるもの食うべからずというコトワザがある様に、お金は決して何もせずに溢れてくるものではない。ではどのようにしてお金は回っているのか？会社、お店はどういう取引を1日・1週間・1ヶ月・1年間と通して行われて成績を作り来年度に挑むのか。一人一人が働いてお金を得られる仕組みがそこにあるのは、会社とお店でのお金の回りがあるからだ。ではその成績を誰が管理しているのか、企業会計における経理部である。また、企業主に社長を相手とする公益法人会計や独立行政法人会系などもある。ではどのようにして計算されているのか、“簿記”である。簿記の種類には“単式簿記”と“複式簿記”がある。単式簿記とは、例えば勘定が一つだけの家計簿で用いられる形式であり、“複式簿記”とは多くの出金・入金・取引先がある様な企業向けの形式である。要するに単式簿記よりも複式簿記のが社会的な一般形式なのだ。

2 目的

そこで本研究では、Cinii のデータベースによる 1920 年代から 2010 年代までの 90 年間に発表された論文の数を分析し、また言葉別や年代別に頻度の多い少ないを解き明かす事で、簿記の文献のタイトルを分析する。その中でも特に「複式簿記」という表現が題目に含まれている文献について着目する。

3 方法

1) 方法と分析対象

Cinii の論文検索式で“簿記”を検索する。次にそれらをデータベース化し、テキストマイニングソフト「Text Mining Studio バージョン 5.0.2」を用いて分析を行った。なお、検索時期は 2014 年 9 月である。文献整理の関係上、2014 年度の文献が完全に網羅されていないのでこの年代を省いて分析を行っている。

「簿記」についての文献は 4,226 件であったが、データベース化した際に、著者名が無い文献と年号が無い文献については省いたため、3,986 件を分析対象としている。また、「複式簿記」についての文献は 541 件であった。

2) 分析手順

分析手順としては、Cinii で論文検索をした結果をデータベース化し、Microsoft Office Excel 2003 により、テキストマイニング用に CSV(タブ切り)データを作成して Text Mining Studio に読み込ませた。

テキストマイニングによる分析は、(1) 基本情報、(2) 単語頻度解析、(3) 特徴語輸出の順に行った。

4 結果

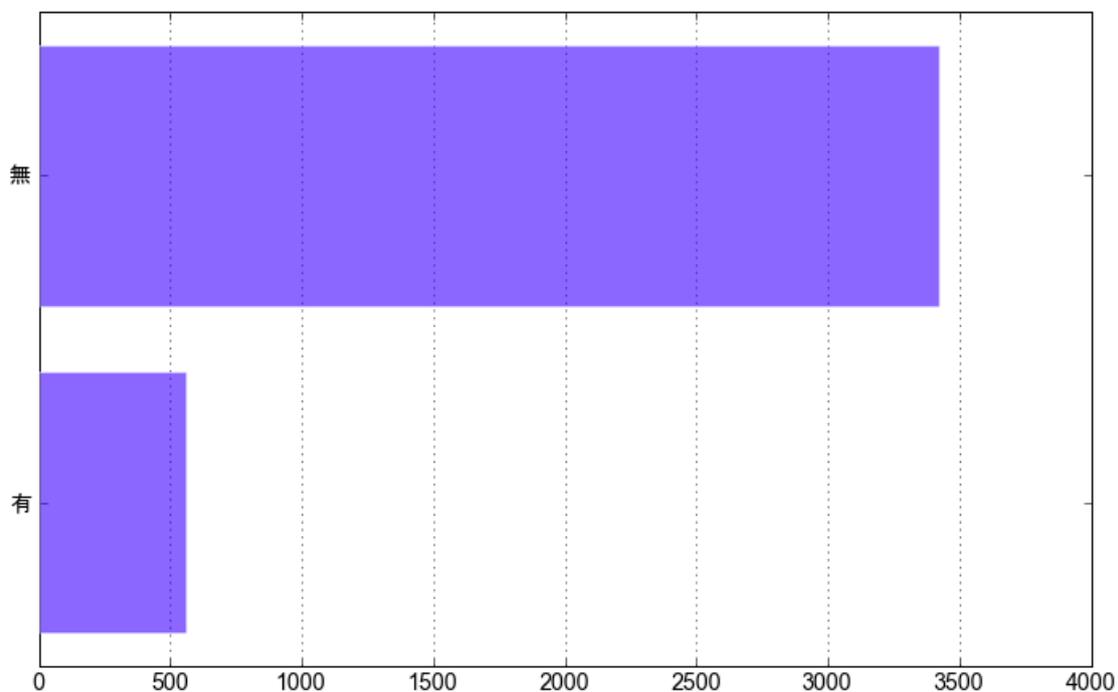


図1 「複式簿記」という表現の有り無し

全体の3,986件中「複式簿記」という表現の有り無しに該当した文献は562件であり、「複式簿記」を含まなかった文献に関しては3,424件であった。以上のことから「複式簿記」よりも「簿記」の言葉である方が、世間一般的に浸透されていることが伺える。

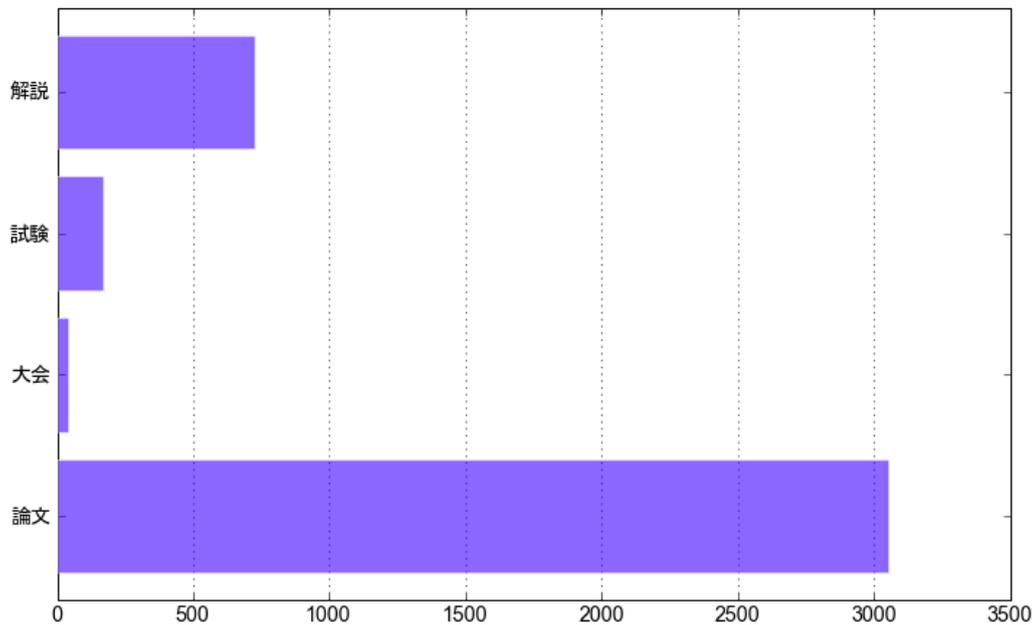


図2 文献の種類

全体を文献の種類により4つのカテゴリーに分類したところ、図2の結果となった。解説に関する文献は726件、試験に関する文献は169件、大会に関する文献は40件、論文に関する文献は3051件であった。試験や解説といった分類は、「簿記」そのものが、社会に適用する専門知識を取得したいと夜から求められていること、またそれに応えるべくして教える側が存在していること、受容と供給の関係があることも明らかになった。しかし、論文のカテゴリーは解説・試験・大会よりも遥かに多い。そのことから、Ciniiに置いては学問として取り上げられていることが分かる。

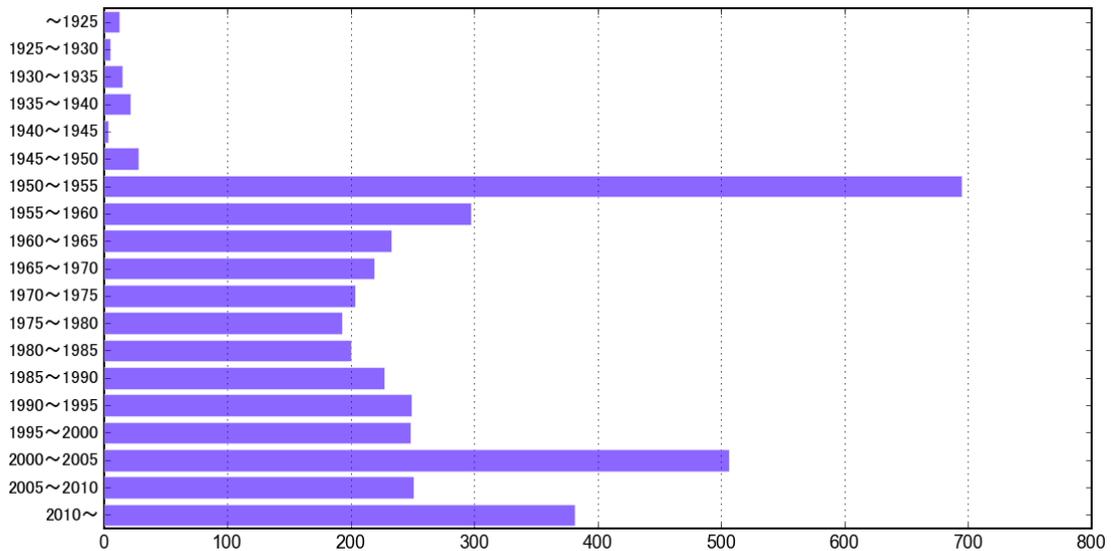


図3 年代別の複式簿記の文献の量

年代別に検索をかけたところ、1950年代の695件が圧倒的に多い結果となった。このことから1950年代に置いて、「複式簿記」がこんなにも注目を浴びた事は、重要視した人が多くいたことが読み取れる。つまり、時代の流れや影響に関連してこの数字が出された。その裏には確かな歴史的背景と経済的根拠もある。1950年に起きた朝鮮勃発戦争の際に、アメリカが日本を軍事調達基地として使用したことが敗戦した日本に特需景気をもたらした。その基盤があって5年後の1955年から高度経済成長が始まっている。

そして二番目に多かったのが2000年代の506件であり、三番目に多かったのが2010年代の381件であった。ちなみに2008年にはリーマン・ショックが起きている。これらを踏まえると、少なからず経済的問題も理由として数が伸びているように思える。

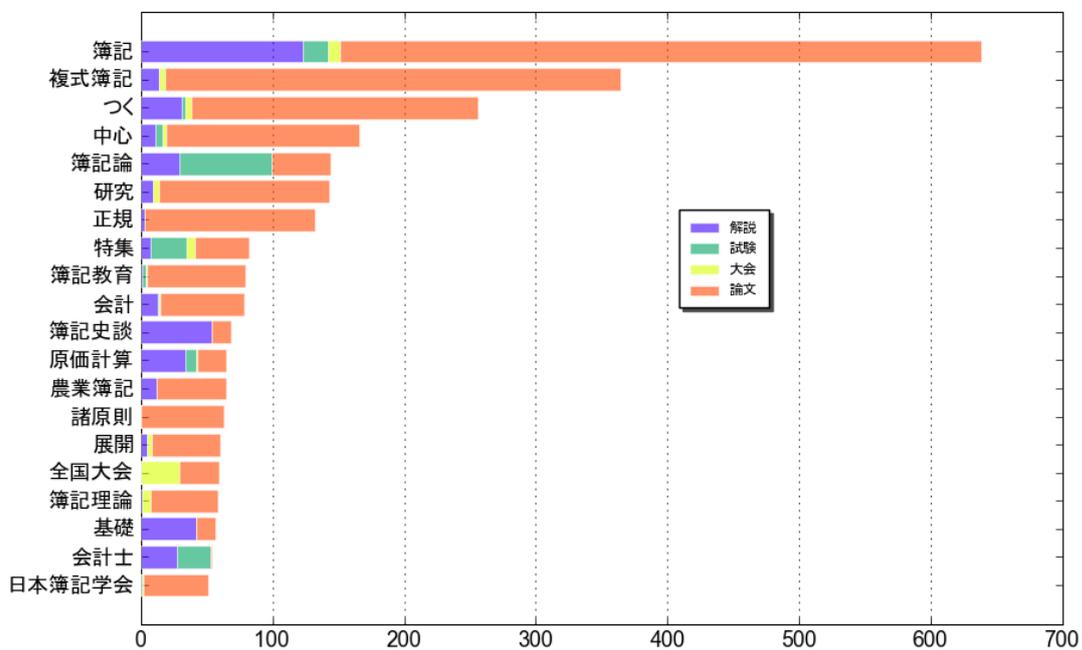


図4 単語頻度の属性別上位20位

更に事細かく種別すると上の図4になり、“簿記”に含まれる論文は638件中438件で、“複式簿記”については全体が364件であるのに対して論文が346件という大多数で占めていることが分かった。圧倒的にピンクの論文カテゴリが多いが、次に占めているのは青の解説であった。

解説のカテゴリでは以下のような結果となっており、簿記123件・複式簿記14件・簿記論29件・簿記史談54件・限界計算34件・基礎42件・会計士27件と、簿記知識取得のために書かれているものも多数あることが分かる。

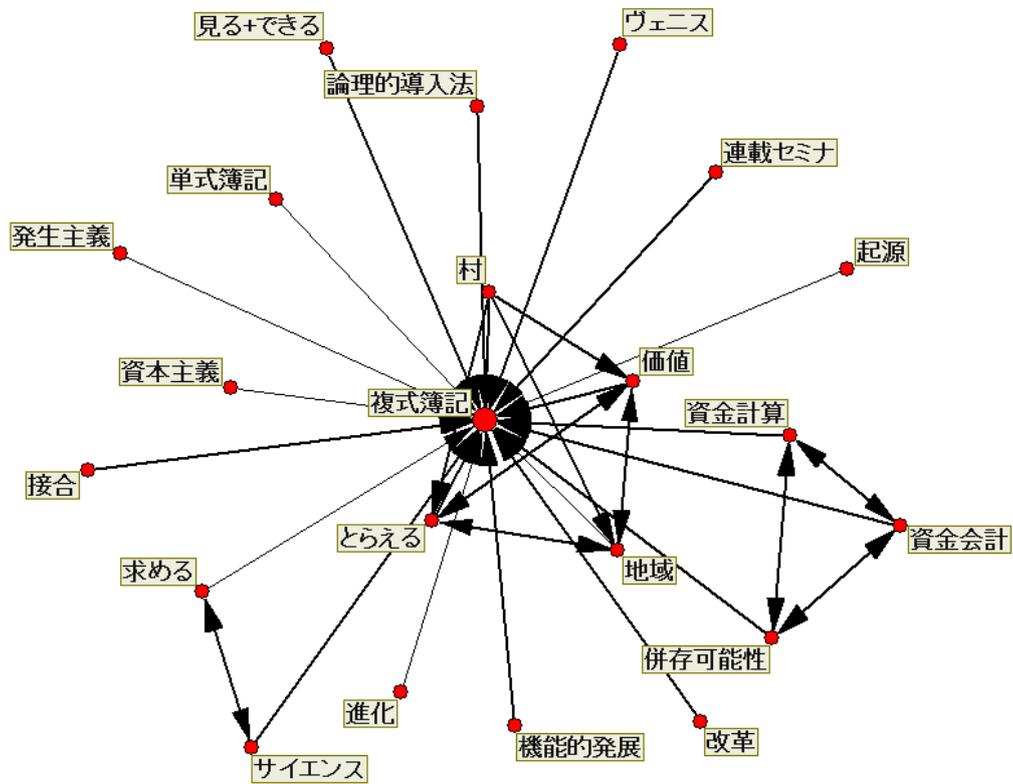


図5 複式簿記に共起する語（4回以上）

注目することばを「複式簿記」に設定と4回以上の頻度で出た言葉に限定し、注目語表現情報検索をしたところ、「サイエンス」＝「求める」「進化」「資本主義」「発生主義」「見る+できる」「改革」等の、現代においては社会と直結して適応されている学問であり、日本に複式簿記が入り込んできた時代から現代に至るまで常に「進化」を続けてきた学問とも言える。また「ヴェニス」「資本主義」「改革」「起源」の単語から、文献のほとんどが複式簿記の歴史に関して書かれており、このことから学術的で歴史的な学問であることが伺える。

5 考察

簿記の研究は、日本に置いて 4,000 以上もあり活発に研究されてきた。中でも「複式簿記」は、論文というカテゴリーの中で歴史的側面を全面的に押し出した文献であることが分かった。

基本情報による年代別グラフによると、簿記の研究が最も盛んであったのは 1950 年代の日本が特需景気を迎えていた時代である。1950 年代前に関する「簿記」における論文はとて少ないが、1950 年代後に関しては、絶えず多くの研究結果が残されている。1950 年以降に簿記の文献が急増したということを指摘した文献は、筆者の調べた限り見当たらないが、この結果は 1950 年代を境目とし、日本全体が「複式簿記」に対する学問に目が向けられてきたことである。

複式簿記については、注目語分析でヴェニスが出てきた事こそが、時代的背景がある学問だということの証明である。また、「資本主義」「資金会計」「機能的発展」「サイエンス」は複式簿記を象徴としている単語である。「資本主義」が発展すれば「複式簿記」の研究が「サイエンス」を通して活発になり、より「機能的発展」を遂げた「複式簿記」はより優秀な「資金会計」の組織をつくり上げた結果が本研究で明らかになった。

現代において通称「簿記」と呼ばれているこの分野は、これまでの「複式簿記」の歴史の変遷があったからこそ、専門的分野の一因として位置づけられた。研究が盛んになったことは、社会に置いて「簿記」の知識・能力は重要な役割に導きをもたらしたのではないだろうか。

本研究の限界は、文献のタイトルのみにはしか着目できなかったことである。にもかかわらず、テキストマイニングにより本研究において、研究の動向・歴史の変遷・「複式簿記」の特徴についての位置を明らかにできたことは確かである。

引用・参考文献

ウィキペディア 簿記 (2014年10月29日)

ウィキペディア 高度経済成長 (2014年10月30日)

ウィキペディア 特需景気 (2014年10月30日)

<http://showa.mainichi.jp/news/1950/12/8200-6b1d.html> 毎日新聞 (2014年10月30日)